



インストール・ガイド

Sybase Event Stream Processor 5.0

Linux

ドキュメント ID：DC01743-01-0500-01

改訂：2011 年 9 月

Copyright © 2011 by Sybase, Inc. All rights reserved.

このマニュアルは Sybase ソフトウェアの付属マニュアルであり、新しいマニュアルまたはテクニカル・ノートで特に示されないかぎり、後続のリリースにも付属します。このマニュアルの内容は予告なしに変更されることがあります。このマニュアルに記載されているソフトウェアはライセンス契約に基づいて提供されるものであり、無断で使用することはできません。

このマニュアルの内容を弊社の書面による事前許可を得ずに、電子的、機械的、手作業、光学的、またはその他のいかなる手段によっても、複製、転載、翻訳することを禁じます。

Sybase の商標は、Sybase の商標リスト (<http://www.sybase.com/detail?id=1011207>) で確認できます。Sybase およびこのリストに掲載されている商標は、米国法人 Sybase, Inc. の商標です。® は、米国における登録商標であることを示します。

このマニュアルに記載されている SAP、その他の SAP 製品、サービス、および関連するロゴは、ドイツおよびその他の国における SAP AG の商標または登録商標です。

Java および Java 関連の商標は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。

Unicode と Unicode のロゴは、Unicode, Inc. の登録商標です。

このマニュアルに記載されている上記以外の社名および製品名は、当該各社の商標または登録商標の場合があります。

Use, duplication, or disclosure by the government is subject to the restrictions set forth in subparagraph (c)(1)(ii) of DFARS 52.227-7013 for the DOD and as set forth in FAR 52.227-19(a)-(d) for civilian agencies.

Sybase, Inc., One Sybase Drive, Dublin, CA 94568.

目次

インストールの計画	1
ライセンスの取得	1
使用可能なライセンス	2
サポートされているオペレーティング・システム	3
ディスク領域とメモリの要件	4
環境変数の更新	4
テンポラリ・インストール・ファイル	5
インストール・ディレクトリ構造	5
再インストールの前に	7
インストール・シナリオ	9
クラスタ設定	10
標準インストールの実行	11
インストーラの使用による標準インストールの 実行	11
コンソールの使用による標準インストールの実 行	15
分散インストールの実行	20
インストーラの使用による分散環境でのインス トール	20
コンソールの使用による分散環境でのインスト ール	25
サイレント・インストールの実行	30
応答ファイルの作成	31
応答ファイルの使用	31
グラフィック・アンインストーラの使用によるアンイン ストール	33
コンソールの使用によるアンインストール	35
トラブルシューティング	37
SySAM ログ	37

索引39

インストールの計画

インストールまたはアップグレードする場合は、事前に環境を準備します。

- インストールまたはアップグレードするコンポーネントとオプションを特定します。
- ライセンスを取得します。
- システムがインストール・シナリオと想定されている使用方法の要件をすべて満たしていることを確認します。

ライセンスの取得

製品をインストールする場合は、事前に SySAM ライセンス・モデルを選択し、ライセンス・サーバ情報を調べて、ライセンス・ファイルを取得します。

Sybase® Event Stream Processor (ESP) では、ライセンスの取得に SySAM を使用し、サブド・ライセンスとアンサード・ライセンスに加え、サブキャパシティ・ライセンスもサポートされています。サブキャパシティ・ライセンスは、仮想化環境の場合や、マルチプロセッサ・マシンで使用可能なプロセッサの一部にライセンスを供与する場合に便利です。

次の手順では、Sybase ソフトウェア資産管理 (SySAM) ライセンスのインストールに必要な操作を簡単に説明します。詳細については、『Sybase ソフトウェア資産管理ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1. SySAM ライセンス・モデルを選択します。

ライセンス・モデル	説明
アンサード・ライセンス・モデル	ライセンス・ファイルからライセンスを直接取得します。アンサード・ライセンスを使用する場合は、製品のインストール先のマシンにライセンス・ファイルを保存します。
サブド・ライセンス・モデル	ライセンス・サーバによって、複数のマシン間におけるライセンスの割り振りを管理します。

2. サブド・ライセンス・モデルの場合は、既存のライセンス・サーバを使用するか、新しいライセンス・サーバを使用するかを指定します。

ライセンス・サーバと製品インストールで、同じマシン、オペレーティング・システム、アーキテクチャを共有する必要はありません。

3. サブド・ライセンス・モデルを選択した場合は、次のいずれかを実行します。

インストールの計画

- 既存のライセンス・サーバとは別のマシンに、新しいライセンス・サーバをインストールします。
 - SySAM 1 ライセンス・サーバが実行されているマシンにインストールするには、『Sybase ソフトウェア資産管理ユーザーズ・ガイド』に記載されている移行手順に従って SySAM 2 に移行します。
4. 製品をインストールする前に、Sybase または Sybase 再販業者から得た Sybase 製品ダウンロード・センタ (SPDC: Sybase Product Download Center) へのアクセス情報を使用して、SPDC の Web サイト (<https://sybase.subscribenet.com>) からライセンス・ファイルを取得します。

注意：ライセンスの生成方法やコピー先が誤っていると、Event Stream Processor は自動的に 30 日の猶予期間に入ります。ライセンス・エラーか警告、またはその両方がクラスタ・ログのみに表示されます (サーバ・ログではありません)。30 日の猶予期間が終わると、適切なライセンスを取得するまで Event Stream Processor は実行できなくなります。運用環境では、インストール時に電子メールによる警告を設定して、猶予期間が終わる前にライセンス・エラーまたは警告に関するメッセージが送信されるようにすることを強くおすすめします。

次のステップ

SySAM ライセンスの詳細については、Sybase 製品マニュアルの Web サイト (<http://sybooks.sybase.com>) にある『Sybase ソフトウェア資産管理ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

使用可能なライセンス

Sybase Event Stream Processor は、Server、Studio、およびほとんどのアダプタに適用される各種ライセンスで実行されます。ライセンスが必要なアダプタもあります。この場合は、基本ライセンスに加えて別途ライセンスが必要です。

表 1：使用可能なサーバのライセンス・タイプ

ライセンス	説明
CP	運用環境
SF	スタンバイ
DT	開発とテスト環境
AC	OEM 運用環境
BC	OEM スタンバイ

ライセンス	説明
EV	評価
不明	必要なライセンス・タイプが分からない場合に選択してください

ライセンスが必要なアダプタの中には、SySAM による標準的な 30 日間の猶予期間があるアダプタと猶予期間がないアダプタがあります。猶予期間があるアダプタはライセンスなしで 30 日間使用できます。猶予期間を過ぎると、有効なライセンス・キーを指定しない限りアダプタは機能を停止します。

ライセンスが必要なアダプタには、次のものがあります。

アダプタ	ライセンス・キー	猶予期間
Reuters Marketfeed	SY_ESP_TR_MF	不可
Reuters OMM	SY_ESP_TR_OMM	不可
Open	SY_ESP_OPEN	可
NYSE Technologies	SY_ESP_WMB	不可
FIX	SY_ESP_FIX	可

サポートされているオペレーティング・システム

Sybase Event Stream Processor サーバと Sybase Event Stream Processor スタジオは、特定のプラットフォームとオペレーティングシステムを実行環境とします。

プラットフォーム	サポートされている OS	コンパイラ	JDK のバージョン
Linux-64 (AMD/Intel)	RHEL 5.2 RHEL 6.0 SUSE 11.0 (termcap-2.0.8-892.2 以降をインストール済み)	gcc 4.2.1	1.6 update 26

必要な **glibc** のバージョンは、サポートされているすべてのオペレーティング・システムで共通で、4.2.1 です。

サポートされる **SDK** のバージョン

カスタム・アダプタの作成に使用する API では、C/C++、Java 1.6、.NET4 がサポートされています。

ディスク領域とメモリの要件

パフォーマンスを最適化するには、最小要件以上のディスク領域とメモリがあるサーバ・マシンに Event Stream Processor をインストールします。

Event Stream Processor インストーラでは、ご使用のマシンにコピーされたテンポラリ・ファイルが使用されます。これらのテンポラリ・ファイルとインストール対象のプログラム・ファイルを格納できる十分なディスク領域があることを確認してください。

次の表は、Event Stream Processor に必要なおおよそのディスク領域を示します。これは、テンポラリ・ファイルとインストール対象のプログラム・ファイルの両方が考慮されています。

	ESP Server	ESP Studio
Linux-64 (AMD/Intel)	500MB	350MB

注意： インストール・プロセス時に、500MB のテンポラリ・ディスク領域が必要になります。これはすべてのプラットフォームに当てはまります。

これらのディスク要件では、Event Stream Processor プロジェクト関連のファイルのサイズは考慮されていません。

メモリ要件は、実行するプロジェクトのサイズ、数、複雑性や、ESP Server と ESP Studio のインストール先が同じマシンか別のマシンかによって異なります。一般に、Event Stream Processor 関連のアクティビティには 1GB 以上の空きメモリを割り振ることをおすすめします。

環境変数の更新

Event Stream Processor インストール・プロセスでは、システム上に環境変数が作成されて更新されます。

インストーラは、環境変数 `ESP_HOME` を作成します。この環境変数は、Event Stream Processor のインストール先のディレクトリを表します。具体的に、`ESP_HOME` の値は次のようになります。

```
$install_location/ESP
```

この環境変数は、Event Stream Processor インストール・ディレクトリを基準とするファイル・パスを参照する場合に使用します。

インストーラは、次の値を追加して `PATH` 環境変数を変更します。


```
$install_location/ESP/lib/jre/bin
```

インストーラは、環境変数 `LD_PRELOAD` を作成し、実行時の ESP Server プロセスと JVM 間のシグナル処理に関する問題を防ぎます。

`LD_PRELOAD` は `$ESP_HOME/lib/jre/lib/amd64/libjsig.so` を参照します。

内部アダプタと外部アダプタのどちらの場合も、環境変数 `JAVA_HOME` は `JRE 1.6.0_26` またはそれ以上のバージョンに設定されている必要があります。

テンポラリ・インストール・ファイル

インストーラでは、ご使用のマシンにコピーされたテンポラリ・ファイルが使用されます。これらのテンポラリ・ファイルを格納できる十分な領域が割り振られていることを確認してください。

テンポラリ・ファイルには約 220MB の空き領域が必要です。デフォルトでは、インストーラはこれらのファイルを `/tmp` ディレクトリにコピーします。

ファイルのインストール先を変更するには、別のディレクトリを指すように環境変数 `IATEMPDIR` を設定します。

デフォルトの `/tmp` ディレクトリを使用するか、別のディレクトリを使用するかにかかわらず、インストール後に残っているファイルを削除しても問題はありません。これにより、ディスク領域を解放できます。

インストール・ディレクトリ構造

インストーラによって作成されるファイルとフォルダについて説明します。

インストール後に多くのフォルダが作成され、重要なファイルが格納されます。これらのファイルとフォルダはインストール時に選択したインストール・フォルダにあります。

ディレクトリまたはファイル	説明
ESP	<p>次のフォルダで構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • adapters – アダプタの設定に関連するファイル、プログラム例、バッチ・ファイルがあります。 • bin – コマンド・ライン・ツールなど、Event Stream Processor (Studio を除く) を構成する実行可能ファイルがあります。Windows プラットフォームの場合は、ESP が使用する .dll ファイルもあります。 • cluster – クラスタ設定 XML の例とノードに関する情報があります。 • doc – 使用条件ファイルの PDF バージョンがあります。 • etc – .xsd ファイルと FIX データ辞書があります。 • examples – CCL の例と、C、Java、.NET の各 SDK の例があります (.NET は Windows プラットフォームの場合のみ)。 • include – C SDK のヘッダ・ファイルがあります。 • java – JAR ファイルがあります。 • lib – アダプタの .cnxml ファイル、ライブラリ・ファイルと、ESP Server が使用する JRE があります。UNIX の場合は、ESP が使用する .so ファイルもあります。 • net – .NET SDK に関するファイルがあります (Windows プラットフォームの場合のみ)。 • security – すべてのセキュリティ・オプション (Kerberos、LDAP、RSA、キーストア RSA、セキュリティなし) に対する XML ファイルがあります。 • studio – Studio に関するファイルとフォルダがあります。 • sysam – SySAM ライセンス情報があります。
jre32	<p>インストーラとアンインストーラが使用する JRE があります。</p>
log	<p>インストーラのログ・ファイルがあります。</p>
Sybase_Install_Registry	<p>インストール・レジストリがあります。</p>

ディレクトリまたはファイル	説明
sybuninstall	次のフォルダで構成されます。 <ul style="list-style-type: none"> • comp – 製品の特定のコンポーネントをアンインストールするための実行可能ファイルがあります。 • ESP – 製品の完全アンインストールを実行するための実行可能ファイルがあります。
SYSAM-2_0	SySAM ライセンス・ツールとライセンス・ファイルがあります。
SYBASE.bat	Windows プラットフォームで ESP_HOME 環境変数を設定する場合に使用されます。
SYBASE.env	UNIX プラットフォームで ESP_HOME 環境変数を設定する場合に使用されます。

このほかに、Studio をインストールした場合に作成されるディレクトリが 2 つあります。これらのロケーションはインストール時に指定します。

ディレクトリまたはファイル	説明
workspaces	Studio の作業領域のロケーションです。
examples	Studio のプログラム例があります。

再インストールの前に

Sybase ESP Server または Sybase ESP Studio を再インストールする場合は、事前に重要な情報をバックアップしておきます。バックアップしておかないと、情報は上書きされたり削除されたりします。

Server または Studio を既存のインストール先と同じフォルダに再インストールする場合は、事前に次の内容がバックアップされていることを確認します。

- すべてのカスタム ライブラリの .so ファイル
- すべての .cnxml ファイル
- すべてのサービス設定 (services.xml) ファイル
- すべてのプロジェクト (.ccl) ファイル

最後に、新しいインストール先でプログラム例が正しく実行されるように、これまで作業領域にロードしたプログラム例をすべて削除します。

インストールの計画

作業領域からプロジェクトを削除するには、Studio 内のファイル・エクスプローラでプロジェクト名を右クリックし、[Remove from workspace] を選択します。

インストール・シナリオ

Sybase Event Stream Processor では、標準インストールとカスタム・インストールを実行できます。カスタム・インストールでは、インストールするコンポーネントを選択できます。標準インストールでは、すべてのコンポーネントがインストールされます。

Sybase Event Stream Processor は、次のもので構成されています。

- **Server** – ストリーム・データの中心的な分析と処理を実行します。
- **基本アダプタ** – Event Stream Processor の基本ライセンスには、内部アダプタと外部アダプタの両方が含まれます。内部アダプタはサーバ・プロセスの内側で実行されるのに対し、外部アダプタは Java SDK などの外部 API を介してサーバ・プロセスにアクセスします。どちらのタイプのアダプタも、外部ソースのデータを読み取って Event Stream Processor のフォーマットに変換するか、Event Stream Processor のフォーマットのデータを変換して外部ソースに書き込みます。内部アダプタは Server と一緒に自動的にインストールされます。外部アダプタは、Server と一緒にインストールするか、まったく別のマシンにインストールするかを選択できます。
- **Studio** – Event Stream Processor プロジェクトをグラフィック形式で表示できます。プログラミングに関する知識なしでプロジェクトを作成、変更、モニタできます。

基本アダプタのほかに、エンタープライズ・アダプタも購入できます (別途ライセンスが必要)。

- Reuters Marketfeed アダプタ
- Reuters OMM アダプタ
- Open アダプタ
- NYSE Technologies アダプタ
- FIX アダプタ

NYSE Technologies エンタープライズ・アダプタ、Reuters Marketfeed アダプタ、Reuters OMM アダプタは、各ライセンスの購入時に提供される専用のインストール・メディアに含まれています。Open アダプタと FIX アダプタは、Event Stream Processor のインストール・メディアにありますが ([カスタム] インストール・オプションを選択してアクセスします)、実行するには別途ライセンスが必要です。エンタープライズ・アダプタは、Server をホストしているマシンへのネットワーク・アクセス権を持つどのマシン上にもインストールできます。

標準インストールの場合、Server、Studio、アダプタは 1 台のマシンにインストールされます。分散インストールの場合は、Server と Studio を複数のマシンにイン

ストールし、Event Stream Processor のサーバ・クラスタを使用してリモート・マシンからプロジェクトを実行できます。

システムのインストールが標準か分散かにかかわらず、インストール時にサーバ・クラスタを作成できます。サーバ・クラスタを使用することで、複数のプロジェクトを同時に実行でき、フェールオーバが実現され、ご使用のシステムに対し集中型セキュリティを設定できます。

ネットワークのインフラストラクチャ、地理的設定、全体的なイベント処理のニーズによって、最適なインストール・タイプが決まります。

標準インストールと分散インストールの両方に、グラフィック・インストーラまたはコンソール (コマンド・ライン) インストーラを使用できます。

また、サイレント・インストーラを使用して Server と Studio の複数のインスタンスをインストールすることもできます。

クラスタ設定

Event Stream Processor 環境用のサーバ・クラスタを設定できます。プロジェクトをクラスタに配備することで、セキュリティと高可用性が確保された環境でプロジェクトを実行できます。

インストール時に、サーバ・クラスタの情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。インストーラは、指定された情報を使用して、インストール用のサーバ・クラスタを設定します。

クラスタ情報を指定する前に、設定を最適化できるように Event Stream Processor でのサーバ・クラスタの設定に関する基本的な内容を理解しておいてください。

Event Stream Processor でのサーバ・クラスタの役割は、次のとおりです。

- 複数のプロジェクトを同時に実行できます。
- ネットワーク・リソース間で負荷を分散し、フェールオーバを実現します。
- 認証、権限などのセキュリティ機能を単一のインタフェースで提供します。

インストール時にサーバ・クラスタを設定するときに、クラスタのホストとポートの入力を求めるプロンプトが表示されます。ネットワーク内からアクセスでき、複数のプロジェクトの実行に関連するトラフィックを処理できるマシンを選択してください。

認証メカニズムも入力してください。Event Stream Processor では独自の認証は必要ありません。代わりに、Event Stream Processor のセキュリティを既存の RSA、Kerberos、または LDAP の認証インフラストラクチャに結び付けることができます。認証を設定した場合、ユーザはサーバ・クラスタ内のプロジェクトにアクセスするときにクレデンシャルを指定する必要があります。必要なクレデンシャルは、ご使用の認証メカニズムによって異なります。

セキュリティ・インフラストラクチャに LDAP を使用する場合は、プロジェクトの開始や停止など、プロジェクトに関する具体的な機能へのアクセス権をユーザの役割に応じて制限することもできます。

クラスタとセキュリティの詳細については、『Event Stream Processor Administrators Guide』を参照してください。

標準インストールの実行

標準インストールでは、基本アダプタ、ESP サーバ、ESP スタジオを 1 台のマシンにインストールします。

標準インストールは、Event Stream Processor を評価する場合または実装をテストする場合にのみおすすめします。

標準インストールでエンタープライズ・アダプタをインストールするには、アダプタのスタンドアロン・インストーラを実行します。FIX アダプタまたは Open アダプタの場合は、Event Stream Processor インストーラを詳細モードで再実行してアダプタのみのインストール・プロセスにアクセスします。

注意： ライセンスの生成方法やコピー先が誤っていると、Event Stream Processor は自動的に 30 日の猶予期間に入ります。ライセンス・エラーか警告、またはその両方がクラスタ・ログのみに表示されます (サーバ・ログではありません)。30 日の猶予期間が終わると、適切なライセンスを取得するまで Event Stream Processor は実行できなくなります。運用環境では、インストール時に電子メールによる警告を設定して、猶予期間が終わる前にライセンス・エラーまたは警告に関するメッセージが送信されるようにすることを強くおすすめします。

インストーラの使用による標準インストールの実行

Event Stream Processor の基本アダプタ、サーバ、スタジオを 1 台のマシンに単一プロセスでインストールします。

1. インストーラ・ファイル `setup.bin` をクリックします。[概要] 画面で、[Next] をクリックします。
2. インストール・フォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[Choose] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。

選択したフォルダが存在せず、フォルダの作成を求めるプロンプトが表示された場合は、[Yes] をクリックします。フォルダがすでにある場合は、フォルダ内のソフトウェアが置換されることを通知する警告が表示されます。[Next] をクリックして、既存のフォルダへのインストールに進みます。

3. インストール・セットとして [Typical] を選択します。Event Stream Processor Server、基本アダプタ、Event Stream Processor Studio がインストールされます。
[Next] をクリックします。

4. ライセンス版または評価版のどちらをインストールするかを選択します。

注意： 評価版をインストールした場合は、ソフトウェアの使用が 30 日間可能になります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。手順 8 に進みます。

5. ライセンス版をインストールすることを選択した場合は、次のオプションのいずれかを選択します。

[ライセンス・ファイルを指定]、[Use Previously Deployed License Server]、または [Continue Installation Without a License Key]。

ライセンスの種類	プロセス
ライセンス・ファイルを指定	<ul style="list-style-type: none"> ライセンス・キーを手動で入力するか、ライセンス・キーを見つけて選択し、ロードします。 [Next] をクリックします。 <p>サブド・ライセンスを使用しているときに、マシン上ですでに実行中の SySAM サーバがインストーラによって検出されたというエラーが表示された場合は、[Previous] をクリックして [SySAM License Entry] パネルに戻り、[Previously Deployed License Server] オプションを選択します。</p> <p>入力したライセンス・キーが無効であると警告メッセージが表示されますが、インストールは続行できます。このソフトウェアには、使用可能な期間として 30 日の猶予期間があります。この日数を過ぎると、有効なキーの入力を求めるプロンプトが表示されます。</p>
Previously Deployed License Server (以前に配備したライセンス・サーバを使用)	<p>ホスト名とポート番号または IP アドレスを入力します。</p> <p>ライセンス・サーバ・ファイルが見つからない場合は、選択したホスト上でライセンス・サーバが実行されていることをインストーラが確認できなかったことを示す警告メッセージが表示されます。ホスト名とポート番号を再入力します。インストーラがライセンス・サーバを確認できなかった場合は、別のライセンス・オプションを選択してインストールを続けます。</p>
Continue Without a License Key (ライセンス・キーを使用しないでインストールを続行)	<p>このソフトウェアには、使用可能な期間として 30 日の猶予期間があります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。</p>

6. ドロップダウン・リストから、設定する製品ライセンスの種類を選択し、[Next] をクリックします。
7. [Yes] または [No] を選択して、SySAM イベントについて電子メールで警告を通知するように設定するかどうかを指定します。SySAM イベントでは、管理者による対応が必要になることがあります。

[Yes] を選択した場合は、SMTP サーバのホスト名、SMTP サーバのポート番号、送信者の電子メール・アドレス、受信者の電子メール・アドレス、メッセージの重大度を入力するか、デフォルトをそのまま使用します。[Next] をクリックします。

注意： インストールした後で SySAM に関する警告の設定を変更するには、ESP_HOME/sysam/esp_license.prop ファイル内の次の行を編集します。

- email.smtp.host=smtp
- email.smtp.port=25
- email.sender=sender@domain.com
- email.recipients=user@domain.com
- email.severity=INFORMATIONAL

email.severity を NONE に設定すると、電子メールによる警告が無効になるため、その他の行はすべて無視されます。電子メールによる警告を有効にするには、email.severity を ERROR、WARNING、または INFORMATIONAL に設定します。SMTP にご使用の SMTP ホスト名、25 にご使用の SMTP メール・サーバのポート番号、sender@domain.com にご使用の電子メール・アドレス、user@domain.com に受信者の電子メール・アドレスを指定します。電子メールの受信者が複数の場合は、カンマ(,) で区切って指定します。

-
8. ドロップダウン・リストから、インストールを実行している地域を選択し、その地域に対応するエンド・ユーザ・ライセンス契約を表示します。使用条件に同意して続行します。[Next] をクリックします。
 9. クラスタ情報を設定します。インストールを実行すると、シングルノード・クラスタが作成されます。
 - a) クラスタの名前を指定します。
 - b) クラスタ内のシングル・ノードの名前を指定します。
 - c) クラスタが使用するキャッシュ・ポートを入力します。クラスタ・キャッシュとは、クラスタの状態と設定情報を共有するための内部キャッシュです。
 - d) ノードをホストしているマシンのホスト名を入力します。または、ノードをローカル(つまりインストールを実行している)マシンで実行する場合は localhost と入力します。
 - e) 設定対象のノードの RPC ポートを入力します。

- f) RPC ポートが SSL (Secure Sockets Layer) を介する接続をサポートするかどうかを指定します。SSL を有効にすると、クラスタへの接続では HTTP ではなく HTTPS が使用されます。
- g) [Next] をクリックします。

注意： インストールした後でクラスタ設定を変更して、さらにノードとクラスタを追加できます。詳細については、『Administrators Guide』を参照してください。

- 10. [Yes] または [No] を選択して、クラスタのパスワードを設定するかどうかを指定します。[No] を選択した場合は、起動時にクラスタ・パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
- 11. クラスタのセキュリティを設定し、[Next] をクリックします。

認証タイプ	説明
なし	オープン・セキュリティが設定されます。この場合は、任意の名前とパスワードの組み合わせを指定することでログインできます。その他の設定は必要ありません。
LDAP	LDAP 認証が設定されます。LDAP 実装の指定に従って次の情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • Server type • プロバイダ URL • デフォルト検索ベース • 認証スコープ
Kerberos	Kerberos 認証が設定されます。Kerberos 実装の指定に従って次の情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • 領域 • KDC
RSA	RSA 認証が設定されます。

- 12. クラスタのキーストア・プロパティを設定します。キーストアとは、暗号化キーを生成するサードパーティのアプリケーションです。これらのキーによって、データベースの読み取りまたは書き込みに必要なパスワードなど、Event Stream Processor 内のデータの暗号化／復号化が行われます。
 - a) キーストア・ファイルのロケーションを指定します。Event Stream Processor は暗号化／復号化の場合にキーストアにアクセスします。
 - b) [Yes] または [No] を選択して、キーストア・ファイルとキーにアクセスするためのパスワードを入力するかどうかを指定します。[No] を選択した場合は、起動時にパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
 - c) (オプション) キーストアのパスワードを入力し、確認のためにもう一度入力します。

- d) [Next] をクリックします。
13. プログラム例用のフォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[Choose] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。
 14. スタジオがプロジェクトを格納するワークスペース・フォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[Choose] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。
 15. 次に進む前に、インストール情報を確認します。前の画面に戻って変更を加える場合は、[Previous] をクリックします。[Install] をクリックすると、インストールに進みます。
 16. インストールが正常終了したことを示すメッセージが表示されます。[Next] をクリックします。
 17. スタジオを今すぐ起動するかどうかを指定します。[Done] をクリックしてインストールを終了します。

ヒント： スタジオが起動しない場合は、ワークスペース・ディレクトリ内の `.metadata` フォルダを手動で削除してみてください。

コンソールの使用による標準インストールの実行

グラフィカル・ユーザ・インタフェースを使用しないで、コマンド・ラインから Sybase Event Stream Processor Server をインストールして設定します。

1. コマンド・ラインから、インストール・ファイル (`setup.bin`) があるディレクトリに移動します。
2. `./setup.bin -i console` と入力し、[Enter] キーを押します。
3. プロンプトが表示されたら、[Enter] キーを押して次に進みます。
4. インストール先を選択します。デフォルトのインストール先をそのまま使用するには、[Enter] キーを押します。ユーザ設定のインストール先を指定するには、次の手順に従います。
 - a) インストール先の絶対パスを入力します。ファイル・パスを指定する場合はスペースを入れないでください。
 - b) [Enter] キーを押します。
 - c) [Y] または [N] を入力して、インストール先が正しいかどうかを示します。

注意： コンソールでは、肯定応答として [Y] と [Yes] のどちらでも使用できます。それ以外の入力はすべて否定応答と見なされます。

- d) 指定したディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって、そのディレクトリを作成するかどうかの確認が求められます。[Y] キーを押しま

す。ディレクトリがすでにある場合は、インストーラによって、フォルダ内のソフトウェアが置換されることを通知する警告が表示されます。

どちらの場合も、[Enter] キーを押して次に進みます。

- [1] を入力して、標準インストールを選択します。基本アダプタ、Event Stream Processor Server、Event Stream Processor Studio がインストールされます。[Enter] キーを押します。

選択したインストール先に以前のバージョンがインストールされている場合は、以前のバージョンをアンインストールするか上書きするかを選択できます。選択肢を指定し、[Enter] キーを押します。

- ライセンス版または評価版のどちらをインストールするかを指定し、[Enter] キーを押します。

注意： 評価版をインストールした場合は、ソフトウェアの使用が 30 日間可能になります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。手順 10 に進みます。

- ライセンス版をインストールする場合は、使用するライセンス・モデルを指定します。

ライセンスの種類	プロセス
ライセンス・ファイル を指定	<ul style="list-style-type: none"> [1] を入力し、[Enter] キーを押します。 ライセンス・ファイルの絶対パスを指定して [Enter] キーを押すか、[Enter] キーを押してデフォルトをそのまま使用します。 <p>サブド・ライセンスを使用しているときに、マシン上ですでに実行中の SySAM サーバがインストーラによって検出されたというエラーが表示された場合は、[Previous] をクリックして [SySAM License Entry] パネルに戻り、[Previously Deployed License Server] オプションを選択します。</p> <p>入力したキーが無効であると、警告メッセージが表示されます。有効なキーを入力するか、別のライセンス・オプションを選択するまで、次に進めません。</p>
Previously Deployed License Server (以前に配備 したライセンス・ サーバを使用)	<ul style="list-style-type: none"> [2] を入力し、[Enter] キーを押します。 [Enter] キーを押してデフォルトのホスト名をそのまま使用するか、[ホスト名] と [ポート番号] にそれぞれ入力します。 <p>ライセンス・サーバ・ファイルが見つからない場合は、選択したホスト上でライセンス・サーバが実行されていることをインストーラが確認できなかったことを示す警告メッセージが表示されます。プロンプトが表示されたら、[Y] を入力してライセンス・サーバを再入力するか、N を入力して別のライセンス・オプションを選択します。</p>

ライセンスの種類	プロセス
Continue Without a License Key (ライセンス・キーを使用しないでインストールを続行)	[3]を入力し、[Enter] キーを押します。続行するかどうかの確認を求めると表示されたら、[Enter] キーを押します。 このソフトウェアには、使用可能な期間として 30 日の猶予期間があります。この日数を過ぎると、ソフトウェアを使用するには有効なライセンス・キーの入力が必要であることを示すプロンプトが表示されます。

8. 設定するライセンス・タイプに対応する番号を入力します。[Enter] キーを押します。
9. SySAM イベントについての警告を設定するかどうかを指定します。SySAM イベントでは、管理者による対応が必要になることがあります。警告を設定するには、次の手順に従います。
 - a) [Y]を入力して、警告を設定することを指定します。
 - b) 電子メール・メッセージを処理する SMTP サーバのホストを入力します。
 - c) SMTP サーバのポートを入力します。
 - d) 電子メール・メッセージの送信元のユーザまたはグループのデフォルトの電子メール・アドレスを入力します。
 - e) デフォルトの受信者の電子メール・アドレスを入力します。
 - f) 電子メール・メッセージのデフォルトの重大度レベル (情報通知、警告、またはエラー) を入力します。

注意： インストールした後で SySAM に関する警告の設定を変更するには、ESP_HOME/sysam/esp_license.prop ファイル内の次の行を編集します。

- email.smtp.host=smtp
- email.smtp.port=25
- email.sender=sender@domain.com
- email.recipients=user@domain.com
- email.severity=INFORMATIONAL

email.severity を NONE に設定すると、電子メールによる警告が無効になるため、その他の行はすべて無視されます。電子メールによる警告を有効にするには、email.severity を ERROR、WARNING、または INFORMATIONAL に設定します。SMTP にご使用の SMTP ホスト名、25にご使用の SMTP メール・サーバのポート番号、sender@domain.com にご使用の電子メール・アドレス、user@domain.com に受信者の電子メール・アドレスを指定します。電子メールの受信者が複数の場合は、カンマ (,) で区切って指定します。

-
10. インストールを実行している地域に対応する番号を入力し、[Enter] キーを押します。

11. ライセンス契約を確認します。必要に応じて、[Enter] キーを押して本文に移動します。いずれかの時点で本文の参照をやめるには、back と入力して [Enter] キーを押します。
12. ライセンス条件に同意することを指定し、[Enter] キーを押します。
13. クラスタ情報を設定します。インストールを実行すると、シングルノード・クラスタが作成されます。
 - a) クラスタ・ノードの名前を入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトを選択します。
 - b) ノードをホストしているマシンのホスト名を入力するか、[Enter] キーを押してデフォルト (localhost) をそのまま使用します。
 - c) 設定対象のノードの RPC ポートを入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトをそのまま使用します。
 - d) RPC ポートが SSL (Secure Sockets Layer) を介する接続をサポートするかどうかを指定します。SSL を有効にすると、クラスタへの接続では HTTP ではなく HTTPS が使用されます。
 - e) クラスタ・キャッシュのポート番号を入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトをそのまま使用します。
 - f) クラスタの名前を指定します。
 - g) クラスタにアクセスするためのパスワードを今すぐ入力するかどうかを指定します。クラスタ内のすべてのノードで同じパスワードが使用されます。[No] を選択した場合は、クラスタ・ノードの起動時にパスワードを入力してください。[Yes] を選択した場合は、クラスタのパスワードを入力します。
 - h) クラスタに適用するセキュリティ・タイプに対応する番号を入力します。
 - 1 – LDAP：LDAP 認証が設定されます。LDAP 実装での指定に従って、次の各フィールドの情報を入力します。
 - Server type
 - プロバイダ URL
 - デフォルト検索ベース
 - 認証スコープ
 - 2 – Kerberos：Kerberos 認証が設定されます。Kerberos 実装の指定に従って次のフィールドの情報を入力します。
 - 領域
 - KDC
 - 3 – RSA：RSA 認証が設定されます。次の RSA 値はデフォルトで設定されます。
 - Digester
 - Provider

- Algorithm

4 - なし：オープン・セキュリティが設定されます。この場合は、任意の名前とパスワードの組み合わせを指定することでログインできます。したがって、その他の設定は必要ありません。

注意： インストールした後でクラスタ設定を変更して、さらにノードとクラスタを追加できます。詳細については、『Administrators Guide』を参照してください。

14. キーストア・ファイルのロケーションを指定するか、[Enter] キーを押してデフォルトをそのまま使用します。
キーストアとは、暗号化キーを生成するサードパーティのアプリケーションです。これらのキーによって、データベースの読み取りまたは書き込みに必要なパスワードなど、Event Stream Processor 内のデータの暗号化／復号化が行われます。デフォルトでは、キーストア・タイプは JKS に設定され、アルゴリズムは RSA になります。
15. キーストア・ファイルとキーにアクセスするためのパスワードを入力するかどうかを指定します。[No] を選択した場合は、起動時にパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。[Yes] を選択した場合は、キーストアのパスワードを入力します。
16. Sybase Event Stream Processor には実例が用意されています。これを実行することで各種機能を評価したり学習したりできます。プログラム例のインストール先の絶対パスを入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトのインストール先をそのまま使用します。
17. スタジオ・プロジェクトのワークスペース・ロケーションの絶対パスを入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトのロケーションをそのまま使用します。
18. インストール前の概要で、インストールに利用できる十分なディスク領域があることを確認します。[Enter] キーを押して次に進みます。
19. [Enter] キーを押してファイルをインストールします。
20. インストールが完了したら、[Enter] キーを押します。
21. Event Stream Processor Studio を今すぐ実行するか、後で実行するかを指定します。[Enter] キーを押します。
スタジオを今すぐ実行することを選択した場合は、スタジオが起動して、インストーラが終了します。スタジオを後で実行することを選択した場合は、インストーラが終了します。

ヒント： スタジオが起動しない場合は、ワークスペース・ディレクトリ内の .metadata フォルダを手動で削除してみてください。

分散インストールの実行

分散インストールでは、Event Stream Processor を別々のマシンにインストールします。インストール対象として、サーバとスタジオのみ、サーバ、スタジオ、外部アダプタとエンタープライズ・アダプタの任意の組み合わせ、または外部アダプタとエンタープライズ・アダプタの組み合わせのみ(サーバとスタジオなし)をマシンごとに選択できます。

注意： SySAM ライセンス・ユーティリティがターゲット・マシンにまだインストールされていない場合は、必ずインストールしてください。たとえば、マシンが他の Sybase 製品をホストしている場合は、SySAM ライセンス・ユーティリティがすでにインストールされている可能性があります。

内部アダプタは常に Event Stream Processor サーバと一緒にインストールされるのに対し、外部アダプタとエンタープライズ・アダプタは Event Stream Processor サーバのインスタンスへのネットワーク・アクセス権を持つどのマシンにもインストールできます。

運用環境では分散インストールをおすすめします。インストールのアーキテクチャ(サーバとスタジオのインスタンスの数とインストール先、エンタープライズ・アダプタの数など)は、ニーズの内容によって異なります。

分散インストールに関する手順は、標準インストールの場合とほぼ同じです。ただし、分散インストールでは、インストールするコンポーネントのみを選択します。また、サーバとスタジオをインストールする場合は、インストール先のマシン上にローカル・クラスタを設定するか、別のホスト上にある既存のクラスタに接続するかを選択します。

注意： ライセンスの生成方法やコピー先が誤っていると、Event Stream Processor は自動的に 30 日の猶予期間に入ります。ライセンス・エラーか警告、またはその両方がクラスタ・ログのみに表示されます(サーバ・ログではありません)。30 日の猶予期間が終わると、適切なライセンスを取得するまで Event Stream Processor は実行できなくなります。運用環境では、インストール時に電子メールによる警告を設定して、猶予期間が終わる前にライセンス・エラーまたは警告に関するメッセージが送信されるようにすることを強くおすすめします。

インストーラの使用による分散環境でのインストール

ネットワーク内の各種マシンに、ESP サーバと ESP スタジオに加えて、外部アダプタとエンタープライズ・アダプタの任意の組み合わせをインストールします。

1. インストーラ・ファイル `setup.bin` をクリックします。[Introduction] 画面で、[Next] をクリックします。

2. インストール・フォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[Choose] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。

選択したフォルダが存在せず、フォルダの作成を求めるプロンプトが表示された場合は、[Yes] をクリックします。フォルダがすでにある場合は、フォルダ内のソフトウェアが置換されることを通知する警告が表示されます。[Next] をクリックして、既存のフォルダへのインストールに進みます。
3. インストール・セットとして [Custom] を選択します。[Next] をクリックします。
4. インストールするオプションを選択し、インストールしないオプションを無効にします。スタジオを選択した場合は、サーバも選択します。

注意： インストール先のマシンが他の Sybase 製品をホストしている場合は、SySAM ライセンス・ユーティリティがすでにインストールされている可能性があります。再度インストールする必要はありません。

5. [Next] をクリックします。

手順 4 で外部アダプタのみを選択した場合 (エンタープライズ・アダプタ、サーバ、スタジオを選択しなかった場合)、インストーラによってインストール設定がまとめられ、インストールを求めるプロンプトが表示されます。インストールを実行するには、[Install] をクリックします。それ以外の場合は、手順 6 に進みます。
6. ライセンス版または評価版のどちらをインストールするかを選択します。

注意： 評価版をインストールした場合は、ソフトウェアの使用が 30 日間可能になります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。手順 10 に進みます。
7. ライセンス版をインストールする場合は、次のオプションのいずれかを選択します。

[ライセンス・ファイルを指定]、[Use Previously Deployed License Server]、または [Continue Installation Without a License Key]。

ライセンスの種類	プロセス
<p>ライセンス・ファイル を指定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ライセンス・キーを手動で入力するか、ライセンス・キーを見つけて選択し、ロードします。 [Next] をクリックします。 <p>サブド・ライセンスを使用しているときに、マシン上ですでに実行中の SySAM サーバがインストーラによって検出されたというエラーが表示された場合は、[Previous] をクリックして [SySAM License Entry] パネルに戻り、[Previously Deployed License Server] オプションを選択します。</p> <p>ライセンス・サーバ・ファイルが見つからない場合は、選択したホスト上でライセンス・サーバが実行されていることをインストーラが確認できなかったことを示す警告メッセージが表示され、指定したホスト名とポート番号の再入力を求めるプロンプトが表示されます。インストーラがライセンス・サーバを確認できなかった場合は、別のライセンス・オプションを選択してインストールを続けます。</p>
<p>Previously Deployed License Server (以前に 配備したライセンス・ サーバを使用)</p>	<p>ホスト名とポート番号または IP アドレスを入力します。</p> <p>ライセンス・サーバ・ファイルが見つからない場合は、選択したホスト上でライセンス・サーバが実行されていることをインストーラが確認できなかったことを示す警告メッセージが表示されます。ホスト名とポート番号を再入力します。インストーラがライセンス・サーバを確認できなかった場合は、別のライセンス・オプションを選択してインストールを続けます。</p>
<p>Continue Without a License Key (ライセン ス・キーを使用しない でインストールを続行)</p>	<p>このソフトウェアには、使用可能な期間として 30 日の猶予期間があります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。</p>

- ドロップダウン・リストから、設定する製品ライセンスの種類を選択し、[Next] をクリックします。
- [Yes] または [No] を選択して、SySAM イベントについて電子メールで警告を通知するように設定するかどうかを指定します。SySAM イベントでは、管理者による対応が必要になることがあります。
[Yes] を選択した場合は、SMTP サーバのホスト名、SMTP サーバのポート番号、送信者の電子メール・アドレス、受信者の電子メール・アドレス、メッセージの重大度を入力するか、デフォルトをそのまま使用します。[Next] をクリックします。

注意： インストールした後で SySAM に関する警告の設定を変更するには、ESP_HOME/sysam/esp_license.prop ファイル内の次の行を編集します。

- email.smtp.host=smtp

- `email.smtp.port=25`
- `email.sender=sender@domain.com`
- `email.recipients=user@domain.com`
- `email.severity=INFORMATIONAL`

`email.severity` を `NONE` に設定すると、電子メールによる警告が無効になるため、その他の行はすべて無視されます。電子メールによる警告を有効にするには、`email.severity` を `ERROR`、`WARNING`、または `INFORMATIONAL` に設定します。SMTP にご使用の SMTP ホスト名、25 にご使用の SMTP メール・サーバのポート番号、`sender@domain.com` にご使用の電子メール・アドレス、`user@domain.com` に受信者の電子メール・アドレスを指定します。電子メールの受信者が複数の場合は、カンマ (,) で区切って指定します。

10. ドロップダウン・リストから、インストールを実行している地域を選択し、その地域に対応するエンド・ユーザ・ライセンス契約を表示します。使用条件に同意して続行します。[Next] をクリックします。
-

注意： エンタープライズ・アダプタのみをインストールする場合は、インストールするエンタープライズ・アダプタごとに手順 6～10 を繰り返します。手順 16 に進みます。

11. クラスタ情報を設定します。
 - a) 新しいクラスタの名前を作成するか、既存のクラスタの名前を入力します。
 - b) 新しいノードの名前を作成します。このノードが既存のマルチノード・クラスタに含まれる場合は、すべてのノード名がクラスタ内でユニークである必要があります。
 - c) ノードのキャッシュ・ポートを入力します。クラスタ・キャッシュとは、クラスタの状態と設定情報を共有するための内部キャッシュです。内部でのみ使用されます。
 - d) このクラスタ・ノードをホストしているマシンのホスト名を入力します。インストール先のマシン内からのみアクセスするシングルノード・クラスタの場合のみ、デフォルトの `localhost` を使用します。
 - e) クラスタ・ノードの RPC ポートを入力します。スタジオ、SDK、その他の各種製品ツールは、このポートを使用してクラスタにアクセスします。
 - f) RPC ポートが SSL (Secure Sockets Layer) を介する接続をサポートするかどうかを指定します。SSL を有効にすると、クラスタへの接続では HTTP ではなく HTTPS が使用されます。新しいクラスタを作成する場合は、SSL を使用するかどうかを指定できます。既存のクラスタに接続する場合は、この選択内容が既存のクラスタの設定と一致するようにしてください。
 - g) [Next] をクリックします。

注意： インストールした後でクラスタ設定を変更して、さらにノードとクラスタを追加できます。詳細については、『Administrators Guide』を参照してください。

12. クラスタのパスワードを今すぐ指定するか、クラスタの起動時に指定するかを指定します。クラスタ内のすべてのノードに同じクラスタ・パスワードが設定されます。パスワードを今すぐ設定するには、[Yes] を選択して、パスワードを入力します。既存のクラスタに接続する場合は、そのクラスタに対して定義されているパスワードを使用します。
13. クラスタのセキュリティを設定し、[Next] をクリックします。既存のクラスタに接続する場合は、既存のクラスタで使用されているセキュリティ・タイプを選択し、そのクラスタのクレデンシャルを指定します。

認証タイプ	説明
なし	オープン・セキュリティが設定されます。この場合は、任意の名前とパスワードの組み合わせを指定することでログインできます。その他の設定は必要ありません。
LDAP	LDAP 認証が設定されます。LDAP 実装の指定に従って次の情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • サーバ・タイプ • プロバイダ URL • デフォルト検索ベース • 認証スコープ
Kerberos	Kerberos 認証が設定されます。Kerberos 実装の指定に従って次の情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> • 領域 • KDC
RSA	RSA 認証が設定されます。

14. クラスタのキーストア・プロパティを設定します。キーストアとは、暗号化キーを生成するサードパーティのアプリケーションです。これらのキーによって、データベースの読み取りまたは書き込みに必要なパスワードなど、Event Stream Processor 内のデータの暗号化／復号化が行われます。既存のクラスタに接続する場合は、そのクラスタに対してすでに定義されているキーストア・プロパティを使用します。
 - a) キーストア・ファイルのロケーションを指定します。Event Stream Processor は、暗号化／復号化の場合にキーストアにアクセスする必要があります。
 - b) [Yes] または [No] を選択して、キーストア・ファイルとキーにアクセスするためのパスワードを入力するかどうかを指定します。[No] を選択した場合は、起動時にパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

- c) (オプション) キーストアのパスワードを入力し、確認のためにもう一度入力します。
 - d) [Next] をクリックします。
15. プログラム例用のフォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[Choose] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。
16. プロジェクトの格納先のワークスペース・フォルダを選択します。デフォルト・フォルダを変更するには、対象フォルダのファイル・パスを入力するか、[選択] をクリックしてフォルダを選択します。終了したら、[Next] をクリックします。
- エンタープライズ・アダプタをインストールする場合は、アダプタごとに手順 6～10 を繰り返します。
17. 次に進む前に、インストール情報を確認します。前の画面に戻って変更を加える場合は、[Previous] をクリックします。[Install] をクリックすると、インストールに進みます。
18. インストールが正常終了したことを示すメッセージが表示されます。[Next] をクリックします。
19. スタジオをインストールした場合は、今すぐ起動するかどうかを指定します。[Done] をクリックしてインストールを終了します。

ヒント：スタジオが起動しない場合は、ワークスペース・ディレクトリ内の .metadata フォルダを手動で削除してみてください。

コンソールの使用による分散環境でのインストール

ネットワーク内の各種マシンに、ESP サーバと ESP スタジオに加えて、外部アダプタとエンタープライズ・アダプタの任意の組み合わせをインストールします。

1. コマンド・ラインから、インストール・ファイル (setup.bin) があるディレクトリに移動します。
2. ./setup.bin -i console と入力し、[Enter] キーを押します。
3. プロンプトが表示されたら、[Enter] キーを押して次に進みます。
4. インストール先を選択します。デフォルトのインストール先をそのまま使用するには、[Enter] キーを押します。ユーザ設定のインストール先を指定するには、次の手順に従います。
 - a) インストール先の絶対パスを入力します。ファイル・パスを指定する場合はスペースを入れないでください。
 - b) [Enter] キーを押します。
 - c) [Y] または [N] を入力して、インストール先が正しいかどうかを示します。

注意： コンソールでは、肯定応答として [Y] と [Yes] のどちらでも使用できます。それ以外の入力はすべて否定応答と見なされます。

- d) 指定したディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって、そのディレクトリを作成するかどうかの確認が求められます。[Y] キーを押します。ディレクトリがすでにある場合は、インストーラによって、フォルダ内のソフトウェアが置換されることを通知する警告が表示されます。

どちらの場合も、[Enter] キーを押して次に進みます。

5. [2] を入力し、インストール・セットとして [カスタム] を選択します。[Enter] キーを押します。
6. インストール対象として選択または選択解除する機能に対応する番号を、スペースを入れずにカンマで区切って入力します。インストール対象としてスタジオを選択した場合は、サーバも選択します。

デフォルトでは、インストーラによって特定のコンポーネントが選択されます。X は選択されたコンポーネントであることを示し、ブランクは選択解除されたコンポーネントであることを示します。コンポーネントの番号を入力すると、現在の選択状態が切り替わります。終了したら、[Enter] キーを押します。

注意： インストール先のマシンが他の Sybase 製品をホストしている場合は、SySAM ライセンス・ユーティリティがすでにインストールされている可能性があります。再度インストールする必要はありません。

7. 手順 6 で外部アダプタのみを選択した場合 (エンタープライズ・アダプタ、サーバ、スタジオを選択しなかった場合)、インストーラによってインストール設定がまとめられ、インストールを求めるプロンプトが表示されます。[Enter] キーを押して次に進み、もう一度 [Enter] キーを押してインストールを完了します。それ以外の場合は、手順 8 に進みます。
8. 選択したインストール先に以前のバージョンがインストールされている場合は、メッセージが表示され、以前のバージョンをアンインストールまたは上書きできることが示されます。選択肢を指定し、[Enter] キーを押します。
9. ライセンス版または評価版のどちらをインストールするかを指定し、[Enter] キーを押します。

注意： 評価版をインストールした場合は、ソフトウェアの使用が 30 日間可能になります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。手順 11 に進みます。

10. ライセンス版をインストールする場合は、次のオプションのいずれかを選択します。

ライセンスの種類	プロセス
<p>ライセンス・ファイル を指定</p>	<ul style="list-style-type: none"> • [1] を入力し、[Enter] キーを押します。 • ライセンス・キーを入力します。 • [Enter] キーを押します。 • ライセンス・キーの検証が正常に終了したら、[Enter] キーを押してインストールを続けます。 <p>サブド・ライセンスを使用しているときに、マシン上ですでに実行中の SySAM サーバがインストーラによって検出されたというエラーが表示された場合は、[Previous] をクリックして [SySAM License Entry] パネルに戻り、[Previously Deployed License Server] オプションを選択します。</p> <p>入力したキーが無効であると、警告メッセージが表示されます。有効なキーを入力するか、別のライセンス・オプションを選択するまで、次に進めません。</p>
<p>Previously Deployed License Server (以前に配備したライセンス・サーバを使用)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • [2] を入力し、[Enter] キーを押します。 • [Enter] キーを押してデフォルトのホスト名をそのまま使用するか、[ホスト名] と [ポート番号] にそれぞれ入力します。 <p>ライセンス・サーバ・ファイルが見つからない場合は、選択したホスト上でライセンス・サーバが実行されていることをインストーラが確認できなかったことを示す警告メッセージが表示されます。プロンプトが表示されたら、[Y] を入力してライセンス・サーバを再入力するか、N を入力して別のライセンス・オプションを選択します。</p>
<p>Continue Without a License Key (ライセンス・キーを使用しないでインストールを続行)</p>	<p>[3] を入力し、[Enter] キーを押します。続行するかどうかの確認を求めるプロンプトが表示されたら、[Enter] キーを押します。</p> <p>このソフトウェアには、使用可能な期間として30日の猶予期間があります。この日数を過ぎると、有効なライセンス・キーの入力を求めるプロンプトが表示されます。</p>

11. 設定する製品ライセンス・タイプを指定し、[Enter] キーを押します。
12. SySAM に関する電子メールによる警告を設定するかどうかを指定します。警告を設定するには、次の手順に従います。
 - a) 電子メールを処理する SMTP サーバのホストを入力します。
 - b) SMTP サーバのポートを入力します。
 - c) 電子メール・メッセージの送信元のユーザまたはグループの電子メール・アドレスを入力します。
 - d) デフォルトの受信者の電子メール・アドレスを入力します。
 - e) 電子メール・メッセージのデフォルトの重大度レベル (情報通知、警告、またはエラー) を入力します。

注意： インストールした後で SySAM に関する警告の設定を変更するには、ESP_HOME/sysam/esp_license.prop ファイル内の次の行を編集します。

- email.smtp.host=smtp
- email.smtp.port=25
- email.sender=sender@domain.com
- email.recipients=user@domain.com
- email.severity=INFORMATIONAL

email.severity を NONE に設定すると、電子メールによる警告が無効になるため、その他の行はすべて無視されます。電子メールによる警告を有効にするには、email.severity を ERROR、WARNING、または INFORMATIONAL に設定します。SMTP にご使用の SMTP ホスト名、25 にご使用の SMTP メール・サーバのポート番号、sender@domain.com にご使用の電子メール・アドレス、user@domain.com に受信者の電子メール・アドレスを指定します。電子メールの受信者が複数の場合は、カンマ(,)で区切って指定します。

-
13. インストールを実行している地域に対応する番号を入力し、[Enter] キーを押します。
 14. ライセンス契約を確認します。必要に応じて、[Enter] キーを押して本文に移動します。いずれかの時点で本文の参照をやめるには、back と入力して [Enter] キーを押します。
 15. ライセンス条件に同意することを指定し、[Enter] キーを押します。

注意： エンタープライズ・アダプタのみをインストールする場合は、インストールするエンタープライズ・アダプタごとに手順9～15を繰り返します。手順20に進みます。

16. クラスタ情報を設定します。
 - a) 新しいノードの名前を作成します。このノードが既存のマルチノード・クラスタに含まれる場合は、すべてのノード名がクラスタ内でユニークである必要があります。
 - b) このクラスタ・ノードをホストしているマシンのホスト名を入力します。インストール先のマシン内からのみアクセスするシングルノード・クラスタの場合のみ、デフォルトの localhost を使用します。
 - c) クラスタ・ノードの RPC ポートを入力します。スタジオ、SDK、その他の各種製品ツールは、このポートを使用してクラスタにアクセスします。
 - d) RPC ポートが SSL (Secure Sockets Layer) を介する接続をサポートするかどうかを指定します。SSL を有効にすると、クラスタへの接続では HTTP ではなく HTTPS が使用されます。新しいクラスタを作成する場合は、SSL を使用するかどうかを指定できます。既存のクラスタに接続する場合は、この選択内容が既存のクラスタの設定と一致するようにしてください。

- e) ノードのキャッシュ・ポートを入力します。クラスタ・キャッシュとは、クラスタの状態と設定情報を共有するための内部キャッシュです。内部でのみ使用されます。
- f) 新しいクラスタの名前を作成するか、既存のクラスタの名前を入力します。
- g) クラスタにアクセスするためのパスワードを今すぐ入力するかどうかを指定します。クラスタ内のすべてのノードで同じパスワードが使用されます。[No] を選択した場合は、クラスタ・ノードの起動時にパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
[Yes] を選択した場合は、クラスタのパスワードを入力し、[Enter] キーを押します。既存のクラスタに接続する場合は、そのクラスタに対して定義されているパスワードを使用します。
- h) クラスタに適用するセキュリティ・タイプに対応する番号を入力します。既存のクラスタに接続する場合は、既存のクラスタで使用されているセキュリティ・タイプを選択し、そのクラスタのクレデンシャルを指定します。
- 1 – LDAP：LDAP 認証が設定されます。LDAP 実装での指定に従って、次の各フィールドの情報を入力します。
 - サーバ・タイプ
 - プロバイダ URL
 - デフォルト検索ベース
 - 認証スコープ
 - 2 – Kerberos：Kerberos 認証が設定されます。Kerberos 実装の指定に従って次の情報を入力します。
 - 領域
 - KDC
 - 3 – RSA：RSA 認証が設定されます。次の RSA 値はデフォルトで設定されます。
 - Digester
 - プロバイダ
 - アルゴリズム
 - 4 – なし：オープン・セキュリティが設定されます。この場合は、任意の名前とパスワードの組み合わせを指定することでログインできます。したがって、その他の設定は必要ありません。

注意： インストールした後でクラスタ設定を変更して、さらにノードとクラスタを追加できます。詳細については、『Administrators Guide』を参照してください。

17. キーストア・ファイルのロケーションを指定するか、[Enter] キーを押してデフォルトをそのまま使用します。
- キーストアとは、暗号化キーを生成するサードパーティのアプリケーションです。これらのキーによって、データベースの読み取りまたは書き込みに必要な

パスワードなど、Event Stream Processor 内のデータの暗号化／復号化が行われます。デフォルトでは、キーストア・タイプは JKS に設定され、アルゴリズムは RSA になります。

18. キーストア・ファイルとキーにアクセスするためのパスワードを入力するかどうかを指定します。[No] を選択した場合は、起動時にパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。[Yes] を選択した場合は、キーストアのパスワードを入力します。既存のクラスタに接続する場合は、そのクラスタに対してすでに定義されているキーストア・パスワードを使用します。
19. Sybase Event Stream Processor には実例が用意されています。これを実行することで各種機能を評価したり学習したりできます。プログラム例のインストール先の絶対パスを入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトのインストール先をそのまま使用します。
20. スタジオ・プロジェクトのワークスペース・ロケーションの絶対パスを入力するか、[Enter] キーを押してデフォルトのロケーションをそのまま使用します。
21. エンタープライズ・アダプタをインストールする場合は、アダプタごとに手順 9～15 を繰り返します。それ以外の場合は、手順 22 に進みます。
22. インストール前の概要で、インストールに利用できる十分なディスク領域があることを確認します。[Enter] キーを押して次に進みます。
23. [Enter] キーを押してファイルをインストールします。
24. インストールが完了したら、[Enter] キーを押します。
25. スタジオをインストールした場合は、スタジオを今すぐ実行するかどうかを指定します。[Enter] キーを押します。

スタジオを今すぐ実行することを選択した場合は、スタジオが起動して、インストーラが終了します。スタジオを後で実行することを選択した場合は、インストーラが終了します。

ヒント： スタジオが起動しない場合は、ワークスペース・ディレクトリ内の `.metadata` フォルダを手動で削除してみてください。

サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールでは、標準インストールで使用される従来のプロンプトが表示されることなく、Sybase ESP Server と Sybase ESP Studio がインストールされます。

サイレント・インストールは、同一またはほぼ同一の複数の Server と Studio をインストールする場合に使用することをおすすめします。サイレント・インストールできるコンポーネントは、次のとおりです。

- Server、内部アダプタ、Studio
- Server と内部アダプタのみ
- Studio のみ
- 1 つ以上の外部アダプタまたはエンタープライズ・アダプタ (単独でのインストールまたはサーバ・インストールによるインストール)

サイレント・インストール応答ファイルを作成し終わったら、応答ファイルを必要な回数だけ実行してソフトウェアのインストールを繰り返すことができます。

応答ファイルの作成

対話型モードでインストーラを実行し、インストール設定を応答ファイルに取り込みます。その後、応答ファイルを使用してインストール設定を再生します。

Sybase Event Stream Processor には、`installer.properties.template` という応答ファイルが用意されています。このファイルはインストーラと同じディレクトリにあります。このファイルにインストール設定を挿入するか、このファイルをテンプレートとして使用してカスタム応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成したら、インストーラと同じディレクトリに `installer.properties` という名前で保存します。複数の異なるインストール設定がある場合は、各応答ファイルに `installer_<name>.properties` という名前を付けます。ここで、`<name>` には、個々のインストール設定を識別するユーザ定義 ID を指定します。

インストール設定を応答ファイルに直接入力するか、次のように対話型 (GUI) インストーラを実行することができます。

1. コマンド・ラインから、インストール・ファイル (`setup.bin`) があるディレクトリに移動します。
2. コマンド・ラインで、`./setup.bin -r <response file> -i silent` を実行します。ここで、`<response file>` には応答ファイルの名前を指定します。このファイル名は絶対パスで指定してください。
このコマンドを実行すると GUI インストーラが起動し、応答ファイルが作成されます。応答ファイルには、GUI インストーラでインストールするときを選択した内容が保存されます。
3. (オプション) 応答ファイルを変更することで、インストール時に発生したエラーをすべて修正します。

応答ファイルの使用

サイレント・インストール応答ファイルを使用して、複数のコンピュータに Sybase Event Stream Processor をインストールします。

応答ファイルを必要な回数だけ実行して、必要な台数のマシンに Sybase Event Stream Processor をインストールします。

インストール・シナリオ

インストールごとに、ターゲット・マシンのコマンド・ラインに次のコマンドを入力します。

```
setup.bin -i silent -f <response_file> -DRUN_SILENT=true -  
DAGREE_TO_SYBASE_LICENSE=true
```

ここで、<response file>には入力応答ファイルを指定します。

このファイル名は絶対パスで指定してください。

応答ファイルを指定しないと、インストール・ファイルと同じディレクトリにある `installer.properties` ファイルが使用されます。このディレクトリに `installer.properties` ファイルがないと、インストーラは正常に起動しません。

ヒント： Studio が起動しない場合は、作業領域ディレクトリ内の `.metadata` フォルダを手動で削除してみてください。

グラフィック・アンインストーラの使用によるアンインストール

すべてのコンポーネントが完全に削除されるように、テスト環境または運用環境から Event Stream Processor をアンインストールします。

前提条件

重要なプロジェクト、クラスタ、サービスの各設定ファイルをすべてバックアップします。特に、次のバックアップが必要です。

- \$ESP/security フォルダ
- \$ESP_HOME/bin/service.xml
- クラスタ設定ファイル (たとえば、node1.xml)

手順

グラフィック・アンインストーラを使用するには、次の手順に従います。

1. ESP_Home/sybuninstall/ESP/main に移動し、uninstall.bin をダブルクリックしてアンインストーラを起動します。
2. アンインストールを開始するには、[次へ] をクリックします。
3. 次のどちらかを選択します。

タイプ	説明
完全アンインストール	Sybase Event Stream Processor のインストール済みの機能とコンポーネントをすべて削除します。
特定の機能のアンインストール	アンインストールする Sybase Event Stream Processor の特定の機能を選択します。

4. 特定の機能をアンインストールする場合は、削除する機能を選択し、[次へ] をクリックします。

注意：完全アンインストールを実行する場合は、手順 5 に進みます。

5. 概要の画面に、アンインストール対象として選択したコンポーネントがリストされます。ファイルをアンインストールするには、[次へ] をクリックします。
6. (オプション) 完全アンインストールの場合は、[ユーザ・ファイルの削除] 画面に、インストールの後で ESP_Home ディレクトリ内に作成されたユーザ・ファイルとユーザ・フォルダがすべてリストされます。これらのファイルをアン

グラフィック・アンインストーラの使用によるアンインストール

インストールするには、[Delete all of these files] を選択します。[次へ] をクリックします。

7. [完了] をクリックします。

注意： Sybase Event Stream Processor を再インストールするには、新しいインストール先にバックアップ・ファイルをすべてコピーします。

次のステップ

アンインストールした後も残っているファイル、フォルダ、サブディレクトリが必要ない場合は、すべて手動で削除します。 ファイルを削除する場合は、ご使用のマシンにインストールされている他の Sybase 製品でも不要であることを確認してください。

コンソールの使用によるアンインストール

すべてのコンポーネントが完全に削除されるように、テスト環境または運用環境から Event Stream Processor をアンインストールします。

前提条件

重要なプロジェクト、クラスタ、サービスの各設定ファイルをすべてバックアップします。特に、次のバックアップが必要です。

- \$ESP/security フォルダ
- \$ESP_HOME/bin/service.xml
- クラスタ設定ファイル (たとえば、node1.xml)

手順

コンソールを使用してアンインストールするには、次の手順に従います。

1. コマンド・ラインから、ESP_Home/sybuninstall/ESP/main に移動します。
2. `./uninstall -i console` と入力し、[Enter] キーを押します。
3. 新しいウィンドウが表示されます。[Enter] キーを押して次に進みます。
4. アンインストール・オプションを選びます。完全アンインストールの場合は 1、カスタム・アンインストールの場合は 2 を入力します。[Enter] キーを押します。

完全アンインストールを選んだ場合は、アンインストーラによって削除対象のコンポーネントがまとめられます。カスタム・アンインストールに戻るには、`back` と入力して [Enter] キーを押し、もう一度選択します。

注意： 完全インストールを選択した場合は、手順 6 に進みます。

5. カスタム・アンインストールを選択した場合は、アンインストール対象として選択するコンポーネントの番号を入力します。選択解除する場合も同じ操作を行います。X は選択されたコンポーネントであることを示し、ブランクは選択されていないコンポーネントであることを示します。コンポーネントの番号を入力すると、選択されている状態と選択されていない状態が切り替わります。選択を完了したら、[Enter] キーを押します。
6. アンインストール前の概要を確認します。ファイルをアンインストールするには、[Enter] キーを押します。
7. インストーラによって作成されたファイルをすべてアンインストールし終わると、インストーラ以外で作成された残りのユーザ・ファイルの削除を求めるプ

コンソールの使用によるアンインストール

プロンプトが表示されます。YまたはNを選択します。[Enter] キーを押すと、アンインストールが完了します。

注意： Sybase Event Stream Processor を再インストールするには、新しいインストール先にバックアップ・ファイルをすべてコピーします。

次のステップ

アンインストールした後も残っているファイル、フォルダ、サブディレクトリが必要ない場合は、すべて手動で削除します。ファイルを削除する場合は、ご使用のマシンにインストールされている他の Sybase 製品でも不要であることを確認してください。

トラブルシューティング

発生する可能性がある問題をトラブルシューティングする場合の一般的な方法について説明します。

SySAM ログ

サブド・ライセンスを使用している場合、デフォルトでは、ライセンス・サーバ・ステータスとエラー・メッセージは log ディレクトリの SYBASE.log デバッグ・ログ・ファイルに書き込まれます。

SYBASE.log はライセンス・サーバに関する問題の診断に使用されます。このログ・ファイルに書き込まれるメッセージの詳細については、SySAM マニュアルに同梱されている『FLEXnet ライセンス・エンド・ユーザ・ガイド』の「デバッグ・ログ・ファイル」を参照してください。

時間の経過とともに、デバッグ・ログのサイズは増加し、古いメッセージの価値は低下します。次のように、デバッグ・ログ・ファイルを定期的にトランケートすることをおすすめします。

1. ライセンス・サーバ・マシンで、次のように入力します。

```
lmutil lmswitch -c license_directory_location SYBASE tmp.log
```

2. SYBASE.log を削除またはアーカイブします。
3. SYBASE.log を再び使用するには、次のように入力します。

```
lmutil lmswitch -c license_directory_location SYBASE SYBASE.log
```

4. テンポラリ・ファイル tmp.log を削除します。

SySAM ログの詳細については、『SySAM ユーザーズ・ガイド』の「SySAM エラーのトラブルシューティング」を参照してください。

索引

E

- Event Stream Processor の削除
 - ウィザードの使用 33
 - グラフィック 33
 - コマンド・ラインから 35
 - コンソールの使用 35

S

- Server の再インストール
 - 情報のバックアップ 7
- Studio の再インストール
 - 情報のバックアップ 7
- Sybase ソフトウェア資産管理 (SySAM) ライセンス 1

あ

- アダプタのライセンス 2
- アンインストール
 - ウィザードの使用 33
 - グラフィック 33
 - コマンド・ラインから 35
 - コンソールの使用 35
- アンサーブド・ライセンス・モデル 1

い

- インストーラによって作成されるフォルダ 5
- インストール
 - カスタム 9
 - サイレント 30
 - 標準 9, 11
 - 複数のコンピュータ上 31
- インストール・ファイル
 - テンポラリ 5

か

- カスタム・インストール 9

さ

- サーバ・クラスタ
 - 機能 10

設定 10

- サーバ・クラスタの設定 10
- サーバのライセンス 2
- サブド・ライセンス・モデル 1
- サイレント・インストール 30
 - 応答ファイルの作成 31
 - 応答ファイルの使用 31
- サポートされているオペレーティング・システム 3
- サポートされるプラットフォーム 3

て

- ディレクトリ構造
 - ファイル 5
 - フォルダ 5
- デバッグ・ログ管理 37
- デバッグ・ログの管理 37
- テンポラリ・インストール・ファイル 5

め

- メモリ要件 4

ら

- ライセンス
 - SySAM ライセンス・モデル 1
 - アダプタ 2
 - サーバ 2
 - 取得 1
- ライセンス・サーバ
 - デバッグ・ログの管理 37
- ライセンスの取得 1

